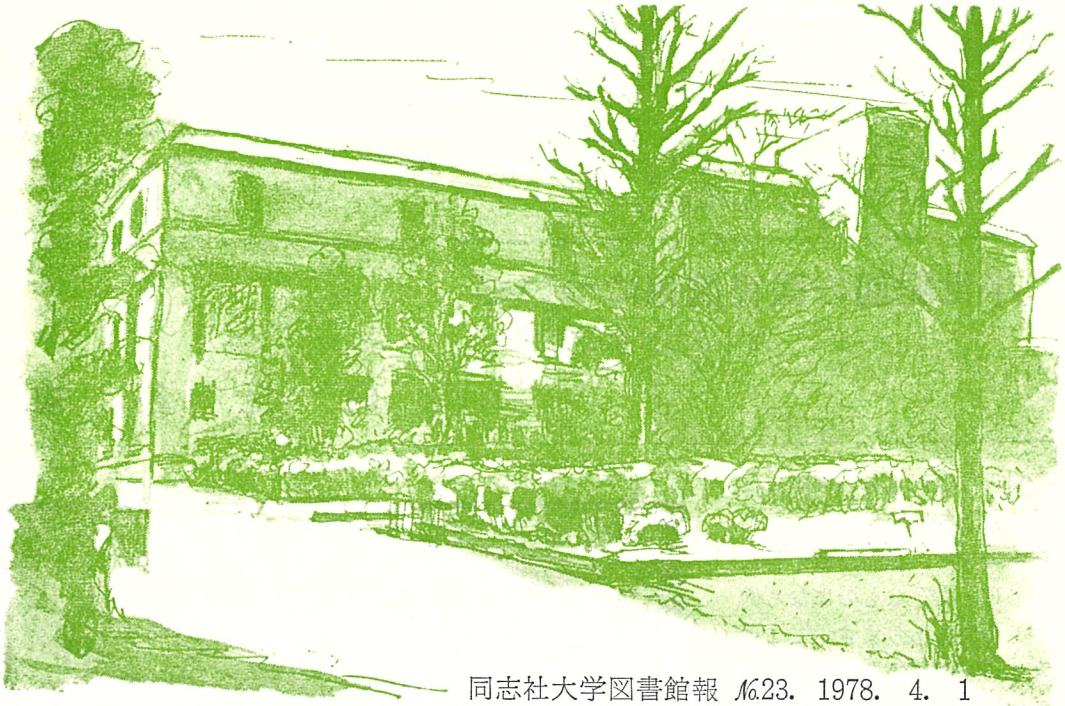
びぶりおてか



同志社大学図書館報 №23. 1978. 4. 1

ライフ・ワークを考える時期

商学部長 内田勝敏

昨年春の大学・短大などへの進学率は38.3%で前年にくらべて0.9%減少した，と報ぜられている。大学への進学率は11年ぶりに低下し，進学熱にブレーキがかかりはじめたのである。それにしても若者の10人に4人が大学に行っているのであり，たとえこの水準でとどまったとしても，大学の大衆化がいちじるしく進んだことは間違いない。

このように大衆化した大学で学生たちはどのようにすごしているのだろうか。

おしなべての学生は単調な受験勉強から解放されて自由と遊びを十分に享受する4年間の時間を得たというのが実感かもしれない。もちろん勉強もするであろう。しかし，勉強は目的のために必要なかぎりでのほどほどの苦労であり，「退屈」で苦しまないためのものでもあるようだ。しかも，このような4年間は，若者をそれなりに大人に成熟させる効用をもっているといわれている。

しかし，学生生活が漫然と自由と遊びを謳歌してその日を送るものであってよいとは思わぬ。ライフ・ワークという言葉がある。一般にこの言葉は学者や芸術家の仕事のことに用いられているようだが，そうではない。誰にでも，どんな年令のひとにでもライフ・ワークがある。目標をもって生きることがそれである。85才の老人が，乏しい小遣を節約して「日本古典文学全集」全巻51冊を買いそろえそれを

目　次

ライフ・ワークを考える時期（内田勝敏）……1
半世紀前の図書館報について……2
視聴覚室について……4
文献探索(21)　自然科学分野……6
ケーリ及び荒木英学文庫目録……9
「実例中心」資料のさがし方(13)……10
同志社大学図書館の歴史(14)……12
ピックアップ“和英語杯集成”……13

1冊ずつ読んでいる，という記事がある新聞にのっていた。まさにライフ・ワークである。

ライフ・ワークは本能のままに生きることではない。生きがいを見出して生きることである。ところで，大学生活は，ある意味では，将来，自分のやりたいことがなにか，ライフ・ワークがなにか，を見つける場所でもある。そもそも大学はそこへゆけば欲するようになんでも身につくという便利なところではない。学びたい欲望があればそのためのたくさんの便宜をはかってくれる場所ではあるが，自からその意志がなければどうにもならないのである。学生時代こそ，自から目標をもち，ライフ・ワークを考える時期としたいものである。

半世紀前の図書館報について

― 当時の図書館活動等 ―

図書館　帆　足　正　規

資料と呼ばれるものの中には，作られた当初，何ほどのこともないものでも，数年，数十年たつうちに，貴重なものになる例がいくらでもあります。ここに紹介する「図書館週報」もその好例で，図書館の倉庫の中の汚いダンボール箱の底に半世紀以上も眠っていたものですが，今となっては，同志社大学図書館の歴史の一駒を知る上で重要でしかも興味深い資料です。

この「図書館週報」は薄手の半紙に謄写版で印刷したもので，大正10年（1921年）2月7日に第1号が発行され，翌年10月19日第55号まで，号外3部をふくんで58枚が揃っています。内容は新刊紹介を中心に，閲覧統計，貸出統計などが掲載されていますが，何しろ半紙一枚ですから内容豊富と云うわけにはゆきません。しかしそのせまい紙面をフルに活用して，図書館活動の紹介，序文の抜粋等を始め，文芸作品―詩，俳句等―から，内外の社会情勢まで巾広く伝えています。

大正10年11月15日（火）発行の第26号を開いてみると次のような記事が載っています。

新刊紹介の項には，上杉博士対美濃部博士最近憲法論（星島二郎編）など6冊，これはこの週が特に購入数の少なかったにはちがいないのですが，現在の週平均購入数が優に200冊を超えることを思うと隔世の感があります。

閲覧統計の欄も比較の好材料ですが，一日平均262人，166冊（館内）同じく3人，5冊（館外）と云う数字が出ています。ちなみに当時の学生数は3003名，教職員数は237名，これも，第43号に紹介されている数字です。昨年同期の一日平均入館者数は5071名，館外貸出は一日平均635冊，当時の館員数を調べることが出来なかったのが残念ですが，この割合でふえていれば現在もっと充実したサーヴィスが出来るだろうにと思うばかりです。活字も体裁も立派になりましたが，このびぶりおてかが年2回発行であるのにくらべて，小さいながらこの週報は毎週，きめのこまかい内容を盛って，図書館と学生とを強く結びつける働きをしていることを羨望の思いで見ていたのですが，これも現在の労

働量から言えば止むを得ないもののようです。

さて第26号の記事に帰って，次に「日誌」が掲げられています。館内では来訪者，寄贈者等を紹介すると共に館外の記事として，

9日　米国伝道会社総幹事バートン博士，致遠館前庭に於て全校学生生徒に対し演説あり

11日　大学学生一同はワシントン会議議長に宛，電報及手紙を発した（別掲）

12日　吉野作造氏講演「国際関係を支配する二種の思想」あり

等が見えています。

次に，見出しは論説と大げさなのですが図書館の仕事の一端を紹介する文章があります。

「図書館ではペーヂ調べと云ふ特殊の仕事があります。購入書，寄贈書，登録書，移贈書皆一々調べなければならぬのです。ペーヂの落ちたのを落丁と云います。あべこべになったのを錯丁と云います。……中略……それから序文のペーヂ，本文のペーヂ，附録のペーヂと一々違って居るのでそれを仔細に調べて元帳に実写記入するのです。中々面倒な仕事であります。試みに御手元の本を一冊，取って調べて御覧なされませ。なみやおろかじゃござりませぬ。

次は彙報です。日誌にもあった，ワシントン軍縮会議に関するニュースです。これも当時の学生運動を知る上で興味深いので全文を引用しました。

去る十一日正午大学学生一同はワシントン軍縮会議々長に宛て下の如き電報及び手紙を発し，亦全国の各大学に対し提携して世界の平和確立運動をなすべく勧告状を発した。

無線電報：　日本同志社大学々生一同は会議の成功を祈る。軍縮会議々長閣下

手　　紙：　日本，京都，同志社大学

一九二一年　休戦記念日

吾人日本同志社大学々生は今や華府（ワシントン）に開催されたる軍縮会議参列全権委員諸氏の高邁なる理想と努力とにより世界に永遠の平和を来らせんことを祈る。

学生署名

軍縮会議々長閣下

続いて，公開図書館が今度，東京板橋区に出来ることになった……と云うニュースが見られます。これが日本に於ける開架システムの始まりのようで，簡単にその歴史，利用法を解説しています。その説明に曰く「公開図書館（Open access library）といふのは1879年アメリカで始めて実施され……当初にあっては管理の困難，紛失等の点から反対されましたが今は閲覧者と館員に斉しく満足を与ふるもの，公徳心を高むるものであるといはれ……」

第26号の最后は広告で　図書館員募集　中学卒業程度　月給　¥ 33.—

と記されています。

第26号だけを例に取って紹介しましたが，この他卒業期には一々宛名を入れて渡すなど，大変親しみやすいものになって居り，この面倒な仕事を毎週つづけていた当時の館員に敬服させられます。

写真に紹介したものは第51号ですが，このカットを見ても，いかに手間がかかり，そして心のこもったものかをわかっていただけると思います。そして右側の二人の聖人の間にはさまれて次のような詩が書かれています。

ＢＩＢＬＥ

あはれ幾度か　読みかへし給ひしならむ
皮の表紙のややにすれ
君が心の象徴の赤き線は
いとも高き　神の御言葉のかたへに　つつましく燃えて居ぬ

古賀英子

この詩を取上げたところにＢＩＢＬＥのみでなく図書一般に対する図書館員の心を見る思いです。

視聴覚室について

── 収集と利用 ──

図書館の視聴覚室がオープンしてほぼ４年を経過しました。旧館時代には全くなかった施設を新館に取り入れ，図書館としても経験したことのない視聴覚関係の業務を始めたのが昭和49年です。もちろん視聴覚室全室（ＡＶ室，第１～第４オーディオ室，マイクロ・リーダー室）を一度にオープンすることはできず，当初はＡＶ室にＦＭ放送を流す程度のことから業務を開始し，全室何とか利用に供せるようになるには１年ほどの時間を要しました。その後も試行錯誤を重ね，順調とは言えませんが何とか軌道に乗るようになって現在に至っています。しかし，この間の学生諸君の利用状況を見てみますと数のうえでもう一つ物足りない所があります。これは図書館側の受入れ体制がまだ充分に整っていないことによるものかも知れませんが，やはりＰＲ不足が一番大きな原因だと思われます。今回は図書館の視聴覚室の概要について述べてみます。

1. 施　設

＜ＡＶ室＞

視聴覚室の中では一番広い部屋で最大54席収容できます。ここにはステレオ再生装置，８ミリ・16ミリ映写機，スライド映写機，オーバー・ヘッド・プロジェクターなどオーディオ・ヴィジュアル（ＡＶ）機器一式を備えています。通常，ＦＭ放送の音楽番組を受信して流していますが，レコード・コンサート，映写会，ＡＶ機器を使用した講演会や図書館利用に関するオリエンテーション等，図書館が主催する種々の行事にこの部屋を使います。読書，勉学に疲れた時など頭休めにぶらりとおいで下さい。

＜第１～第４オーディオ室＞

第１オーディオ室にはレコード，テープ（オープン，カセット）の再生装置を備えており，ここでは10人程度までのグループ鑑賞が可能です。

第２～第４オーディオ室にはカセット・テープデッキ，オープンリール・テープデッキ，レコード・プレイヤーをそれぞれ備えており，ここではヘッドフオンによる個人鑑賞ができます。ＡＶ準備室から借り出した録音済のカセット・テープは第２オーディオ室で利用していただきます。

＜マイクロリーダー室＞

マイクロリーダー４台，マイクロリーダー・プリンター１台を備えています。当分の間，利用できるのは原則として教職員に限っていますが，マイクロ写真資料が増大すれば将来は利用者の拡大に向うと思われます。

＜ＡＶ準備室＞

担当職員が在室しており，ここで利用の受付けを致します。ＡＶ資料・機器の管理や操作もここで行います。また，暗室にはマイクロ写真撮影機，現像機を備えています。

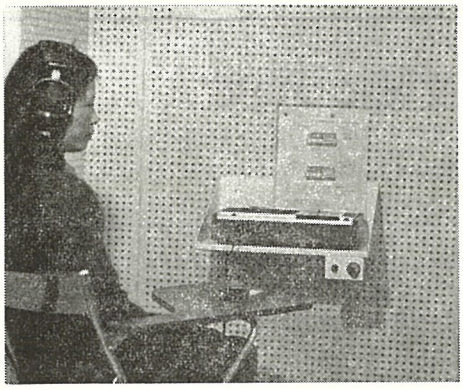
2. 視聴覚資料

近年来の情報量の氾濫，科学技術の発達による情報メディアの多様化には目をみはるものがあります。紙にインクで印刷された図書資料だけが図書館の収集対象ではなくなってきました。当館での対応の仕方は，他に比べて残念ながら進んでいるとは言えませんが，視聴覚資料の収集・利用についても力を入れて取り組んで行かなければいけないと思います。

ここでは当館における主な視聴覚資料の収集状況とその検索方法について述べてみます。尚，ＡＶ機器を必要としない，絵画・写真・地図・図表・掛図等の視聴覚資料については省略しました。

＜マイクロ写真資料＞

図書資料を微小写真化したもので，機械的に拡大した影像あるいはプリントを読むというプロセスをふみます。大量の情報の記録を小さくフィルム化し，場所をとらずに管理することができます。主なものにロールフィルム，アパーチュアカード，マイクロフィッシュなどがあります。資料の形態あるいは利用手段は特殊ですが，内容は一般の図書資料と何らかわるものではありませんので，当館では一般の図書資料と同等扱いにして収集・整理しています。出版されたマイクロ写真はまだほんのわずかしか購入していませんが，将来は逐次増加して，かなりの力を発揮する



ものと思われます。

また，現在貴重室の図書のマイクロ写真化が進行中で，これが完成すると普段利用の上できびしい制約がある貴重室の図書を比較的簡単に閲覧できることになります。

〔検　索〕

一般の図書資料と同様に整理し，カード目録を分類・著者・書名の㊙目録にそれぞれ一緒にして配列しています。内容が雑誌・新聞であれば，雑誌・新聞目録に配列しています。従ってカード目録で探した資料がたまたまマイクロ写真の形で所蔵しているということになります。ただ，一般のものと区別するためカードの色がピンク色のものを使用しています。また，形態上，書庫内では別置していますから，請求記号も特殊なものを与えています。

＜レコード，テープ＞

視聴覚室が発足した当初は洋楽のいわゆるクラシック音楽といわれるもののレコードを重点的に収集しました。主要な曲が揃って来た現在ではその範囲を民族音楽，ジャズ，邦楽，さらには民俗芸能まで広げています。受入れしたレコードは目録カードを作成して整理し，ＡＶ準備室の書庫に配架します。また，レコードの貸出しは行っていませんので，ＡＶ準備室ではオーディオ室で個人鑑賞するものに限って，カセット・テープに一時的に録音したものを貸出ししています。

〔検　索〕

ＡＶ準備室内にカード目録の「レコード・テープ目録」を設置しています。このような目録は，作曲者，演奏者，曲名，分類それぞれから検索できるのが本来の形ですが，当館では係員の不足でそこまで徹底することができていません。それでもどのようなレコードやテープがあるかを探すのに何らかの手がかりになると思います。この目録は，基本的には音楽の場合は作曲者のＡＢＣ順に，音楽以外の作品の場合は原作者のＡＢＣ順に並んでいます。

同一作曲者あるいは原作者の中では曲名あるいは題名の順に並んでいます。この場合クラシック音楽等については，同じ楽曲の曲名が資料によってまちまちな形や言語で表示されているものがありますので，これらが分散しないようにあらかじめ統一した曲名を与えておき，その「統一題名」の下にまとまって並んでいます。作曲者あるいは原作者を見出し語にとることが困難な場合は資料の全体につけられた題名の順に並んでいます。また，全体は，クラシック，ジャズ，邦楽等の大まかなジャンルに分けていますが，この分け方についてはまだ検討の余地があり，今後の課題として残っています。目録カードの記載の形等詳しいことはＡＶ準備室に掲示しています。

＜映画フィルム，スライド，ビデオ・テープ＞

映像でしか得られないもので，学術的・資料的に価値が高いものを収集の対象にしていますが，現在のところ収集・整理ともまだ手つかずの状態です。ただ，映画については，公共団体や専門業者より貸出しを受けた音楽映画や伝統芸能映画などを使用して映画会を催しています。スライドは図書館利用のオリエンテーションに使用するため当館で自作したものがありますが，今後もこのように利用案内や講義等の補助手段となる映像資料としてとらえられて行くことが多いでしょう。また，ビデオ・テープについては，機器はまだ購入していませんがその簡便さ，効率のよさを考えますと，将来，重要な動く映像資料となるはずです。

3.　視聴覚室の利用手続き

視聴覚資料は全て館外貸出しをしていません。従って利用は館内に限られています。

ＡＶ室は開室時間内に自由に入室して下さい。手続きは不要です。

オーディオ室の利用申し込みの受付はＡＶ準備室で行っています。学生証と引き換えにヘッド・フォン，カセットテープの貸出しを受けて下さい。

マイクロ・リーダー室は現在暫定的に，特別な場合を除いて，利用できるのは教職員に限られています。

また，レコード・コンサートの演奏希望曲等のアンケートを常時募集しています。御協力をお願いします。

4.　おわりに

たいへん簡単に視聴覚室と視聴覚資料について述べてみました。まだまだ未完成の部分やいたらない所が多いと思いますが，学生諸君も利用の上で気付いた所があれば，どしどし御意見を寄せて下さい。

自然科学に関する二次文献について

（雑　誌・参考図書）

今回は自然科学に関する二次文献を紹介します。自然科学といっても範囲が広いので，今回は自然科学全般を扱う索引，目録，文献類と科学理論，科学哲学，自然科学史，日本科学史に関する文献で，同志社大学図書館に所蔵しているものを紹介します。

自然科学関係の専門書誌は人文科学や社会科学関係に比べて少いので，単行本や全集の巻末に参考文献として載っているものも紹介してあります。

〔1〕科学文献の利用法

1. 科学文献—まとめ方・さがし方・利用の仕方—

高橋達郎，野村悦子，笹森勝之助著　南江堂　昭45

（㊫407；T 3）

科学技術研究者自体のための文献利用のガイドとして編集されている。内容は「研究者と文献利用」，「文献の分析・整理」，「文献のさがし方」，「文献の入手」等について詳しく記述されている。

2. 化学の研究調査と文献—逐次刊行物を中心として

川村信一郎著　南江堂　昭50　（㊫028.43；K）

化学の文献調査の為の本であるが，文献の基本的な説明や，自然科学一般についても「科学雑誌の歴史」，「自然科学一般の雑誌リスト」の記述がある。

3. 二次資料の解説—科学技術文献抄録・索引誌ガイドブック—（NIPDOKシリーズ9）

日本ドクメンテーション協会　昭44　（㊫028.4；D）

和文・欧文の科学技術関係の抄録誌・索引誌を収録。各々の文献について，発行所，刊行回数，使用言語，収録範囲，索引の種類，内容等をくわしく解説している。

〔2〕記事索引・所在目録

4. 雑誌記事索引　科学技術編

紀伊国屋書店　（㊫P027；Z 2）

昭25年に「雑誌記事索引—自然科学編—」として創刊，第16巻(昭40)以後，編名を科学技術編に変更。国立国会図書館参考書誌部が編集している雑誌記事索引で，採録対象誌は1319誌（昭51年現在）。

採録対象記事は学術論文，研究報告，資料等で，原則として2ページ以下の記事，簡単な情報・記事，資格試験問題，随想等は除外してある。各記事の排列は分類別で，同一分類項目の中の排列は，論題名の五十音順になっている。全収録誌名一覧は，年間総索引に掲載してある。

5. 技術雑誌記事索引

テクノ（未整理，雑誌参考室二次文献コーナー）

昭52年4月に創刊。産業関係の雑誌を中心に，これに関連する科学技術分野を加えたものの記事を収録。収録対象誌は，約400誌で，原著論文，解説，展望，ノート，座談会を主として収録。排列は分類別。毎号に収録対象雑誌リスト（出版社名，住所付）が載っている。

6. 文献ジャーナル

富士短期大学出版部（P 027；B）

日本全国の大学が発行する約1,500種類（昭52年現在）の紀要類の目次を収録し，月刊で発行されている。目次の排列は，北海道・東北，東京都関係等の地域別になっている。

7. 自然科学関係の雑誌の総索引・総目次

下記の雑誌については，雑誌参考室の二次文献コーナーに総索引又は総目次があります。

「科学」（岩波書店）総索引：第1巻（昭11）以後収録

「科学朝日」（朝日新聞社）総索引：第31巻(昭46)以後収録

「サイエンス」（日本経済新聞社）総目次：第3巻（昭48）以後収録

「自然」（中央公論社）総索引：第1巻（昭21）以後収録

8. 日本科学技術関係逐次刊行物目録

国立国会図書館　昭50　（㊫028.4；K）

昭48年12月現在，日本国内で刊行されている科学技術関係逐次刊行物（定期刊行物，会議録，技術リポート，新聞，通信類，紀要類，年報，年表）7087タイトルの目録。排列は，国際十進分類法により分類し，同一分類番号中は，誌名のアルファベット順に

排列。巻末に誌名索引がある。

9. 日本自然科学雑誌総覧

日本医学図書館協会編　学術書出版会　昭44
（㊫028.4；N）

日本で刊行された自然科学に関する雑誌・研究報告・資料等で，逐次刊行物の形態で刊行されたものについて，明治初年までさかのぼって，和文誌編・欧文誌編にわけて収録。排列は誌名のアルファベット順。欧文誌名索引がついているので，和文誌で，欧文タイトルを持っているものについても欧文誌名から検索出来る。

10. Scientific, medical, and technical books; published in the United States of America. (The National Research Council's Committee on Bibliography of American Scientific and Technical Books) 1945—52（㊫016.5；H），1956（㊫016.5；H-1a）

アメリカで出版された科学関係の図書目録で，自然科学一般，数学，物理，化学，生物，心理，工学一般，通信工学，熱工学等の項目別に，著者名のアルファベット順に収録し，それぞれの著作について，出版社，出版年等の出版事項と著作の内容概略，注記が記載されている。巻末には出版社の住所録，著者索引，項目索引がある。

11. 学術雑誌総合目録　自然科学和文編　1968年版

文部省大学学術局編　東京電機大学出版局　昭43
（㊫027.5；G 3）

昭和41年8月1日現在の主要国，公，私立大学，国立国会図書館をはじめ官公庁所轄の研究機関，および民間の研究機関等が所蔵する関係資料を収録した雑誌所在目録で，約25,000種の雑誌を収録している。

12. 学術雑誌総合目録　自然科学欧文編　1975年版

文部省学術国際局監修　国際医学情報センター編
紀伊国屋書店　昭50

昭和49年8月1日現在の主要国，公，私立大学，国立国会図書館をはじめ官公庁所轄の研究機関，および民間の研究機関，合計321個所の所蔵する関係資料を収録した雑誌所在目録で，約33,900種の雑誌を収録している。自然科学欧文編は今後1年ごとに補遺版が，4年ごとに改訂版が刊行される予定で，現在1975年版第2補遺版追補まで刊行されている。

この他現在発行中の欧文雑誌の総覧として，Ulrich's international periodicals directoryがあり，これは項目別に分類し排列してあるので，自然科学関係の雑誌を調べる事が出来る。雑誌所在目録としては，同志社大学で所蔵する雑誌の目録として「同志社大学図書館雑誌新聞目録」「同志社大学継続雑誌新聞目録」があり，国立国会図書館，立命館大学，法政大学，関西大学等の雑誌所蔵目録もある。

〔3〕自然科学全般

13. ブリタニカ国際大百科事典　別巻：参考文献

ＴＢＳブリタニカ　昭50　（㊫031；B）

ブリタニカ国際大百科事典の大項目事典全20巻に収められた約5,000項目それぞれに対する参考文献を収録したもの。日本語の文献を優先し，必要に応じて外国語の文献も含めてある。いずれも入手しやすい文献を優先してある。収録してある文献の種類は，単行本・全集・シリーズ，論文，政府・公共機関・民間機関刊行物，定期・不定期刊行物，辞典・事典・年鑑，文献目録である。

14. ライフ　ネーチュア　ライブラリー　全20巻

タイム・ライフ　ブックス　昭48　（㊫408；R）

①進化，②鳥類，③魚類，④昆虫，⑤爬虫類，⑥植物，⑦哺乳類，⑧生態，⑨動物の行動，⑩霊長類，⑪原始人，⑫海，⑬両極，⑭地球，⑮山，⑯宇宙，⑰砂漠，⑱日本列島，⑲日本の生物，⑳日本人と自然，の全20巻にわけて編集。各巻共巻末に和文，欧文の参考文献と年表がついている。

15. 自然科学の名著

湯浅光朝編　毎日新聞社　昭46　（㊫028.4；Y）

科学の古典を数学，天文学，物理学，化学，地学，生物学，医学，技術，科学思想の9部門にわたって，単行本を主として選択し，各著作について解題している。巻末に参考文献と年表がついている。

16. 明治文化全集　第27巻　科学篇

明治文化研究会編　日本評論社　昭42
（㊫210.6；M 5）

明治時代の科学関係の著作15篇の原文を載せ，各文献の詳細な解題がついている。巻末に明治20年迄の刊本の「科学関係文献年表」がついている。

〔4〕自然科学史・科学理論・科学哲学

17. 原典による自然科学の歩み

玉虫文一，木村陽二郎，渡辺正雄著　講談社　昭49
（㊫402.3；T）

自然科学史の中から「宇宙」「物質」「生命」のテーマを設け，重要と思われる原典の一部を抜粋採録し，それに解説を付けている。原典の和文訳本については，それぞれの項目中に，参考文献は巻末に記載されている。

18．日本科学技術史大系　全25巻別巻1

日本科学史学会編　第一法規出版　（㊫402.1；N）

科学史，科学思想，自然，電気，機械，化学，農学，医学等の科学分野を資料を中心として記述。各巻末に参考文献目録（単行本が主）がついている。

19．科学と技術の歴史　全2巻

R. J. Forbes, E. J. Dijksterhuis 著

広重徹他訳　みすず書房　昭38　（㊫402；F-1a）

西洋文化が科学技術の分野で発展して来た歴史を記述。各巻巻末に欧文の文献を中心とした参考文献がついている。

20．歴史における科学

J. D. Bernal 著　鎮目恭夫他訳　みすず書房　昭31　（㊫402；B-2b）

今日における科学の意義と将来における科学の動向を，科学の過去を社会の諸変化と結びつけて研究。巻末に欧文の参考文献が15ページにわたって記載されている。

21．日本の科学百年

本田一二著　鹿島研究所出版会　昭44　（㊫402.1；H 2）

文化史的立場から日本の科学史を記述。巻末に参考文献がある。

22．科学史

湯浅光朝著　東洋経済新報社　昭36　（㊥501.9；Y2-2）

日本科学史の通史。巻末に参考文献（明治以後の科学史を取り扱った単行本と雑誌の特集号のみ）がある。

23．解説科学文化史年表

湯浅光朝著　中央公論社　昭35　（㊥509；Y5-1a）

人類発生から昭34年までの科学文化史を解説と年表を組み合せて記述。巻末に科学史一般，天文学史，化学史，技術史，伝記，年表・辞典等の項目別に参考書目一覧（単行本のみ）がついている。

24．日本科学技術史

朝日新聞社　昭37　（㊥509.1；A）

明治維新以前の日本科学技術を主な対象として記述。巻末に項目別の参考文献がついている。

25．お雇い外国人　第3巻：自然科学

上野益三著　鹿島研究所出版会　昭43　（㊫210.6；O 3）

お雇い外国人の中の自然科学者について記述。巻末に一般と人物別の参考文献がある。

26．中国文明の形成

薮内清著　岩波書店　昭49　（㊫402；Y-3）

古代から漢代までの中国文明の歴史を記述。巻末に参考文献（逐次刊行物）がある。

27．中国の科学と文明　第1期全11巻

Joseph Needham 著　思索社　昭49―　（㊫402.2；N-1a）

中国文化圏における科学と技術の歴史を記述。現在第7巻まで刊行。第1巻序篇，第3巻思想史下，第6巻地の科学，第7巻物理学，の各巻末に詳細な参考文献がついている。文献は，A：1800年以前の中国語文献，B：1800年以後の中国語および日本語文献，C：西欧語文献にわけてある。最終巻には1900年までの中国人の科学者，技術者，学者の伝記的小辞典が載る予定。

28．日本自然誌の成立―蘭学と本草学―

木村陽二郎著　中央公論社　昭49　（㊫402.105；K 3）

西欧との接触で日本にもたらされた科学が蘭学の興隆と近代自然誌の探求によって日本に根づいてゆく過程を記述。巻末に日本自然誌略年表と参考文献がある。文献は一般，人物と洋書原典にわけて記載，人物では，シーボルト，青木昆陽，平賀源内他42名についての伝記，研究書，論文を載せている。

29．現代科学思想事典

伊東俊太郎編　講談社　昭46　（㊫403.3；G 3）

科学史，科学哲学の各項目について解説。項目ごとに参考文献（単行本・雑誌論文）がついている。巻末に科学史・科学哲学に関する定期刊行物一覧表がある。

30．江戸時代の洋学者たち

緒方富雄編　新人物往来社　昭47　（㊫402.105；O2-2）

江戸時代に活躍した洋学者67名の人と仕事と影響を記述。巻末に全般的な資料とそれぞれの洋学者についての個人別の参考文献がついている。

31．科学概論―科学の哲学―

永井博著　創文社　昭43　（㊫401；N 2）

「科学の哲学」の立場で書かれた科学概論。巻末に欧文の参考文献（単行本，雑誌，辞典）が多く載っている。

32．科学思想史概説

本多修郎著　朝倉書店　昭50　（㊫402；H 9）

自然哲学史を背景として自然科学史の展開を記述。巻末に一般科学史を主として参考文献がついている。

33．Dictionary of scientific biography.

Charles Scribner's Sons. 1970―（㊫403.5；D）

科学者の伝記事典。それぞれの人名ごとに参考文献を著作，二次資料に分けて記載してある，現在第13巻まで刊行。

図書館から

「ケーリ文庫目録」と「荒木英学文庫目録」の刊行について

ケーリ文庫目録

今回刊行の蔵書目録には，ケーリ家が三代にわたり収集された主として日本およびキリスト教関係の洋書947点を収録した。このコレクションには，数多くの稀書が含まれているが，それらの中のめぼしい図書63点の写真をアート紙31頁にわたって掲載した。目録部分は，58頁で，主題別に見出しをつけ，特に資料の集中するところは抽出して細目をつけ，利用の便を計った。また，「ケーリ文庫と稀覯本」（重久篤太郎先生）「ケーリ家とケーリ文庫」（オーテス・ケーリ教授）を付したが，この文は，文庫の成り立ちを如実に示す解説として，多くの示唆を与えるものとなっている。従来，蔵書目録には著者索引のみを付して来たが，この目録には書名索引をも付した。以上のような内容で構成された薄クリーム色B5版131頁の蔵書目録である。

ちなみに刊行までの経過を記せば，故フランク・ケーリ博士の記念会（1974. 3 開催）の席上，ケーリ教授から本学図書館へ寄贈の申し出があり，特殊文庫として別置保管することにし，特に貴重な図書の仮目録を作成（1974. 3），破損補修（1974. 10—12），マイクロフィルム化（1974. 11）の作業のかたわら，図書に挿入されている多数の書簡，書評などの検討・整理を経て，図書原簿登録，目録作成作業に入ったのが1975年3月であった。また整理終了とともに開始された冊子目録編集には，約3ケ月（1977. 12〜1978. 3）を要している。

新しく出来た書庫3階の貴重室に収まった「ケーリ文庫」が，この蔵書目録の完成により一層利用の便を増し，研究・教育に役立つならば望外の幸せである。

荒木英学文庫目録

荒木英学文庫目録は本学図書館で所蔵している，荒木和一旧蔵書のうち，明治末年迄の英学関係図書（和蘭・英・仏・独・露を含む）264タイトル，331冊を収録しているものである。

荒木和一旧蔵書は，荒木和一氏が，故ミス・デントン女史との親交，故牧野虎次元総長とのクラス・メートであった等の縁故で，その旧蔵書の大部分，約20,000冊を，氏の没後，昭和32年11月に，本学図書館に寄贈されたもので，その貴重な蔵書の内から，特に，今般，英学関係書を選択し，荒木英学文庫として，別置するに当り，冊子目録を刊行して，氏の遺徳を偲ぶことになった。

荒木和一氏は，明治5年2月5日，大阪に生まれ，欧米雑貨輸入業者の先覚，荒木安吉氏の養子となり，第三高等中学（三高の前身）に学び，後，語学研究の為に渡米，帰国後，家業を継ぐが，その後，加奈陀サン生命保険会社に勤めた。

氏は英語に通暁し，しばしば，大阪への外国からの来賓の，通訳の任を果している。

また，映写機械，バイタ・スコープを，初めて輸入して，活動写真と命名したことは，有名である。

氏の該博な知識のもとでの蔵書の収集は，厖大なもので，数々の貴重書が含まれるが，その内，特に，終生，興味を持続した英語への関心からか，英学関係資料はもとより，江戸時代の外国語関係資料として，蘭学，仏学等迄及んだ語学関係の図書は，その質量ともに，特筆すべきものがある。次にその内の一，二を紹介すると，先づ蘭学関係としては，マーリンの「大蘭仏辞典」第4版，ロッテルダム刊（1768年），大槻玄沢著（1788年（天明8年））刊行の「蘭学階梯」，桂川中良の「蛮語箋」（1798年（寛政10年）），藤林淳道の「訳鍵」（1810年（文化7年）），「和蘭文典」（1842年（天保13年））や，柳河春三の「袖珍洋学便覧」（1866年（慶応2年））等，蘭学関係のめぼしい，図書をほとんど網羅しているのである。

英学関係では，石橋政方の「英語箋」（1861年（万延2年）），「智環啓蒙塾課初歩」（1866年（慶応2年）），開成所刊の「英語階梯」（1866年（慶応2年））等があり，辞書としては，堀達之助編，堀越亀之助補の「改正増補英和対訳袖珍辞書」開成所刊，（1866年（慶応2年）），所謂，薩摩辞書の複製ではあるが，それ迄の上海での印刷と違って，我国で始めて日本製鉛活字で印刷した「稟準和訳英辞書」（1873年（明治6年））等，珍奇なものが枚挙に遑ない程である。

仏語関係としては，村上俊英の「仏語明要」（1864年（元治1年）），「法朗西文典」（1866年（慶応2年））等があり，独語関係では「日耳曼字九つ以呂波」（1871年（明治4年））等が見られ，その他，啓蒙的な多色刷した図版の単語集等，余りにも見るべきものが多い。

今回のこの目録の刊行が，斯界の研鑽の資に，幾分かの貢献を果せるならば，幸甚である。

実例を中心とした
資料のさがし方 —13—

はじめに

今回は，自然科学関係の質問をとりあげて，資料のさがし方を紹介しましょう。求める資料は質問者によって，その内容や形態などが全く異ってきますが，ここでは，カウンターに寄せられた質問のうち，もっとも多く，一般的なものを挙げてみました。

Ⅰ．用語，数値，データ等を知りたい場合

【質問例1】

太陽風（プラズマ流）とはなにか。

＜回答＞

参考図書室の百科事典を見てください。「太陽風・たいようふう」「太陽プラズマ流」などの項目のもとに説明されています。

【質問例2】

「ＱＵＡＳＡＲ」の訳語とその意味（科学用語）

＜回答＞

「岩波理化学辞典第３版」（403.3；Ⅰ-1b）の「恒星状天体」の項，更に詳しくは「世界科学大事典」（403.3；Ｓ３）の「ケーサー」の項を見て下さい。

【質問例3】

京都の物体の落下速度を知るために，重力を知りたいのですが，その測定値はなにを調べればよろしいか。

＜回答＞

参考図書室の「理科年表」（403.6；Ｒ）を調べてください。わが国各地の重力実測値が出ています。

【質問例4】

水に対する固体の溶解度表はないか。

＜回答＞

参考図書室の「実験化学便覧」（432；Ｊ２）を見てください。

≪解説≫

【質問例1】の「太陽風：たいようふう」は参考図書室のどの百科事典を見ても，その概略を知ることが出来ます。ただ注意して欲しいことは，事典によって大項目，中項目，小項目と項目の立て方がそれぞれ異っていることです。そのため，或る用語を知りたい場合，いきなり事典でその項目を探さず，必らず「索引」を使って，項目の記載されている巻数と頁数を調べてください。百科事典には必らず「総索引」が別巻として附されているのが普通です。例えば「世界大百科事典（平凡社）」では19巻の「大気」の大項目のもとに，「地球超高層大気の限界とジオマグネティック・キャヴィティー」の小項目があり，その中に「太陽プラズマ流」の記述があって，「総索引」で頁数を確認していないと，探すのは殆んど不可能です。

【質問例2】の「ＱＵＡＳＡＲ」は訳語が解らないのですから，百科事典で調べることは出来ません。そのような場合には，専門分野の事典を利用することです。専門分野が解らない時は，なるべく分類上位（広範囲の専門分野）の事典に当ってみることです。例えば，社会科学大事典20Ｖ．（303.3；Ｓ２），世界科学大事典19Ｖ．（403.3；Ｓ３）などです。質問例では，科学用語の外国語索引のあるものが必要になってきますが，「岩波理化学辞典」には「英独仏索引」が付録にあり，「世界科学大事典」には，第19巻の「総索引」に「英語項目索引」が付けられていて，これによって「ＱＵＡＳＡＲ」の概略を知ることが出来ます。ちなみに，５タイトルの百科事典（分類031）の索引を調べたところ，クウェサー→準星，準星〔クウェーサー〕，クェーサ→準星，準星→恒星状天体，準星，恒星状天体，準星状銀河系，準星電波源などとなっており，項目の立てかたが違っていました。

【質問例3】と**【質問例4】**は，物理や化学上の数値やデータを知りたい場合の例で，概説的な百科事典では解決しないものです。このような場合には，まず専門分野（質問例では分類の400部門：自然科学）の上位に適当な資料がないかどうかを捜すことです。つまり，分類で言えば，403：参考図書→420：物理学，403；参考図書→430：化学にないかと言うことです。「理科年表」（403.6；Ｒ）は暦部，天文部，気象部，物理化学部，地学部の５部で構成され，

各部門に年表，統計，計算値，図表，数値等を収めています。そのために，上位に分類されています。それに比べて「実験化学便覧」（432;Ｊ２）は化学関係の数値，データに限られるので下位に分類されているわけです。「理科年表」は数値，データ等の収録対象が広範にわたりながらハンディなものにしているため，その内容は簡略になっています。それは，【質問例４】の溶解度表は「理科年表」よりも，「実験化学便覧」の方が詳しいのを見てもわかります。

以上の例は，すべて参考図書室で調べて解決した例ですが，問題によっては，単行書，雑誌，報告書，パンフレット等によらなければ解決しないことがあるのは言うまでもありません。

Ⅱ．引用文献をさがしたい場合

【質問例５】

R. Uyeda & N.Kato : J. Appl. Phys. Japan 17 (1948) 370 (in Japam) の文献が知りたい。

＜回答＞

雑誌の「応用物理」東京　応用物理学会　第17巻　370頁以後に記載されている論文です。資料は電気系文献室にあります。

【質問例６】

"Stabilité de solution des systêms d'équations differentielles à paramétres alestoires." Rev. Roumaine Math. Pures Appl. 11 (1966) , 7211 by T. Morozan. 上記の文献についてあるか否か知りたい。

＜回答＞

本学では所蔵していません。「学術雑誌総合目録　自然科学欧文編　1975年版」〔027.5;Ｇ３〕によりますと省略誌名でなく，完全誌名の "Revue Romane de Mathematiques Pure et Appliquees" で所蔵機関・巻号が記載されています。

【質問例７】

H. Neuber, Z. AMM 44—7 (1964) P285—（歯車に関する論文）は何の意味か。資料はどこにあるか知りたい。

＜回答＞

"H. Neuber,, は著者名。"Z. A. M. M.,, は雑誌の略記名。"44—7,, は雑誌の巻号。（1964）は発行年で引用（参照）文献を略記したものです。 "Zeitschrift fur Angewandte Mathematik und Mechanik. Bd. 44,, は機械系文献室に所蔵しています。

≪解説≫

特定の研究テーマを持ち，それに関連した文献をさがすために，どんな文献を利用するかについて，ある調査では情報源の約50％が文献の脚注や引用文献で占められているという結果がでています。そのためにも，脚注や引用文献の書き方は少くとも知っておく必要があります。しかしそれは論文の書き方や雑誌の投稿規定などを参考にしてください。また引用文献の種類も，一般の単行書，雑誌，論文集記事，レポート，学位論文，会議報告書等とさまざまですが，ここでは雑誌の略名についての例だけを挙げました。

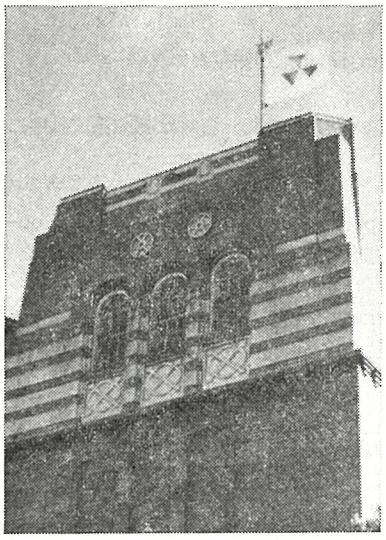
【質問例５】では和文雑誌に欧文雑誌名があるために欧文誌なのか和文誌なのか解らなかった例です。このような場合には，「日本自然科学雑誌総覧」〔028.4;Ｎ〕（1969）で調べるのが有効です。誌名が和欧両文で表記されているものは，どちらからでも索引できるようになっています。日本語雑誌の略記については，その特殊性から省略不要という考え方もありますが，自然科学分野では，化学における「日本化学総覧」と上記の「日本自然科学雑誌総覧」の略名の基礎となっている，日本医学図書館制定の「日本医学雑誌略名表」とがあります。最近では，科学技術庁がドクメンテーションおよび情報処理技術の標準化をはかるため，「雑誌名の略記に関する基準」（1977）を発表しています。

【質問例６，７】はいずれも，欧文雑誌の略名例です。自然科学分野の欧文誌の略名については，代表的なものとして次のものがあります。化学分野での Chemical Abstracts（「化学便覧・基礎編Ⅰ，付録ⅡⅢ〔430.3;K2-1a〕参照），医学分野の Index medicus，科学技術分野の World list of Scientific Periodicals〔入荷中〕などです。これらの省略方式はさまざまですが，その変遷をみると次第に短くなる傾向があります。その極端な例が【質問例７】です。上記のような雑誌名省略法は，省略規則よりも伝統，習慣あるいはその資料の編集方針に重きをおいて形成されてきたものです。これに対し，同一雑誌がいろいろに省略されるのを統一しょうとする立場から，雑誌名省略の規則性に重点をおくものがあります。ＤＩＮ：Deutche Industrie Normen（独），ＢＳ：British Standards.（英），ＡＮＳＩ：American National Standard Institute（米），などの名で呼ばれる国家規格として情報関係の規格を定めたものです。更に国際規格として，一般的なものにＩＳＯ：International Organization for Standardization，電気関係ではＩＥＣ：International Electrotechnical Conmission があります。

一般に，科学論文を知る手がかりとして，上述の脚注や引用文献とともに，「索引誌」や「抄録誌」が同じような比重を占めています。これらの索引や抄録は，その論文の掲載雑誌名は必ず省略され，上記のいずれかの系統に属した略記法がとられているものです。しかし，実際には微妙な違いが不明瞭であったり，誤解することもあるかと思われます。そのような時には，図書館のメイン・カウンターなり，レファレンス・カウンターの図書館員に遠慮なく御相談ください。

同志社大学図書館の歴史（その14）

― 百 年 概 史 (1) ―



わが同志社大学の図書館は同志社創立の翌1876（明治９）年，寮舎の１室を書籍縦覧室（図書室）としたのにはじまる。これは同年，今出川相国寺門前（現クラーク記念館付近）に新築された木造２階建の２棟の寮舎の第二寮舎の階下東側の約53㎡ばかりの１室があてられたのである。そして，校祖新島襄が，同志社の真に輝けるものとなるであらうと確信された〝三個の要素〟は「一，吾等の土台石たる基督」「二，充分に資格を具えたる教師」「三，優秀なる図書館」であったが，その言葉を具現するかのように建てられたのが，彰栄館（現中学校校舎）・公会堂（現中学校チャペル）につづいて1887（明治20）年に竣工した書籍館（現有終館）であったとすることができよう。この書籍館は第１代の図書館であり，ついで1915（大正４）年と1919（大正８）年の２期にわたって建築された旧図書館（現啓明館）は当時の同志社としては鉄骨煉瓦造５階建の最高のものであって，象徴的な建物であったとすることができよう。さらに1973（昭和48）年竣工の現図書館は第３代目の図書館として同志社第２世紀に向けての発展を期するかのように，その偉容を誇っているのである。

1876（明治８）年，僅か７名の学生から出発した，わが同志社は，そののち多くの困難を乗り越えて百年の歩みを続けたが，その発展の歩みとともに学校教育になくてはならない図書および図書館の充実に力を注いできた。そのうちでも収書の歴史を顧みると，1876（明治９）年の書籍縦覧室は内外の新聞・雑誌多数と数百部の洋書が備えてあったと伝えられている状態から1887（明治20）年書籍館竣工の頃は約3,000冊となり，その後1891（明治24）年に設置された小室・沢辺文庫（小室信介・沢辺正修を記念して寄贈された文庫）をはじめ多くの寄贈による特殊文庫が設置された。それらの主なるものに植木文庫（植木枝盛旧蔵書）・愛山文庫（山路愛山旧蔵書）・浮田文庫（浮田和民旧蔵書）・荒木文庫（荒木和一旧蔵書）および極く最近設置されたケーリ文庫（フランク・ケーリ旧蔵書）などがある。こうして増加した蔵書は昨年度末現在で263,000冊（図書館蔵書のみ）となっているのである。

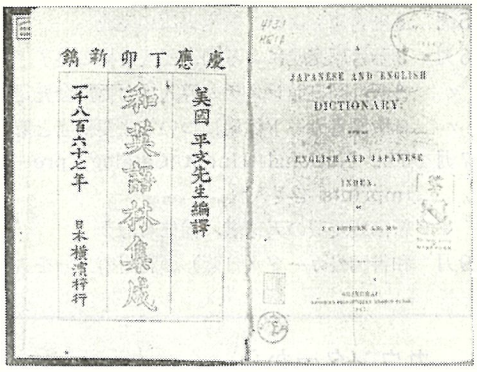
一方，利用状況については初期は詳かにしないが，1920（大正10）年度の閲覧者数は19,246人，貸出冊数21,026冊と記録されている。以降1930年代までは大きな変化はなかった模様で，太平洋戦争期の衰微の極ともいうべき時代を経て，新制大学発足（1948年）以来，学生数の累増と相俟って利用状況は急激な増加をきたすこととなったのである。このような利用学生の増加に対処するため1953（昭和28）年より1957（昭和32）年まで，読書館（現至誠館東部分）２階に小規模の開架閲覧室を設けた。しかし，この開架閲覧室は本館蔵書のうちから複本のあるものの１部を置き，貸出をしないという急場を凌ぐものでしかなかった。このような不備を改めるために，ようやく1957（昭和32）年，有隣館（現光塩館付近）２階の大教室を大閲覧室（約350席）に転用，ようやく小康を得ることとなったのである。この閲覧施設の広大に伴って，本格的な開架閲覧・貸出実施へと向ふようになり，まづ1957（昭和32）年４月から有隣館閲覧室に経済学部父兄会文庫を開架式で設置し学生の自由な閲覧に供し，翌1958（昭和33）年４月からは，この経済学部父兄会文庫を本館閲覧室に移し，これに図書館蔵書を加えて開架式で，閲覧・貸出を実施したのである。学生数の増加と，このような開架式の実施は利用の増加に連ったことは当然であり，さらに新図書館に移ってからは急増を示しつつあり，これの対策が焦眉の問題となっている。

ピックアップ

ヘボンの「和英語林集成」

今回は先頃冊子体目録が完成したケーリ文庫から，ヘボン（1815—1911）の「和英語林集成」（初版）（英書名：A Japanese and English Dictionary；with an English and Japanese Index）を紹介しましょう。

ヘボン式ローマ字の創始者として知られるヘボン（J. C. Hepburn）は1815年米国ペンシルヴァニア州に生まれ，1859年（安政6年）に米国長老教会派宣教師，また医師として幕末の日本にやってきました。そして1892年（明治25年）の帰国までの30年余りに及ぶ日本滞在の間に様々な仕事を成しました。医師としての活動，キリスト教の伝道と聖書の翻訳，ヘボン塾や明治学院等における教育活動，そして和英・英和辞書の執筆，刊行です。



来日以来8年間に及ぶ日本語の研鑽の結果，本書は1867年（慶応3年）に完成しました。その間の苦労や困難については本書の前書や書簡に記されています。たとえば1836年（慶応2年）のホルドリッチ氏宛の書簡には次のようなことが書かれています。「日本語は西洋の諸国民には全く新しい言語でありましたし，われわれの手許には辞書も，文法書もなかったので，最初から自分ですっかり研究しなければならなかったのです。……7年間，単語を蒐集し，それらを分類定義し，日本語の文法上の原則や慣用句になれるよう努めることのほか，ほとんど何もいたしませんでした。それは極めて，のろい，骨の折れる方法でありました。」（高谷道男編訳「ヘボン書簡集」より）この1866年，ヘボンは，助手として岸田吟香（1833—1905）を伴って，本書印刷のため上海に赴き，翌1867年印刷を終り帰日，横浜で本書を発行しました。発行部数は1200部，印刷は非常に鮮明で読みやすいものです。なおこの「和英語林集成」という名称は岸田吟香の考案によるものです。

本書は，和英辞書の部（558p.）と Index と名付けられた英和辞書の部（132p.）とで構成されています。和英の部は約2万語が収録されており，各項目はまずローマ字による日本語の見出しをアルファベット順に並べ，続いて片仮名，そして漢字があれば漢字を記し，そのあとに英語の相当語句や英語による定義そして用法等が記されています。たとえば「Fuyu，フユ，冬，n. Winter.」といった具合です。英和の部は約1万語で，英語の見出しに続いて，該当する日本語がローマ字でいくつか挙げられています。たとえば「Science, Gaku； jutsz.」というようになっています。もっとも，適切な日本語もしくは概念そのものがないため，英語の見出し自体が省略されたり，まれには「Kiss, No equivalent for this word in the Japanese.」（equivalentは「相当語句」の意）となっている場合もあります。またこの初版においては，日本語のローマ字化の方法は，現在普及しているいわゆるヘボン式とはかなり違ったものですが，日本語をローマ字化するのはかなり困難な作業であったようです。また本書の前書には，「単語をローマ字化する時には，すべての場合において，最も教養のある日本人によって発音される音を表現するように努めた。」と記されています。

ヘボンは本書を，最終的目標である聖書の翻訳のための基礎資料として，また日本語を学ぶ外国人のために書いたのですが，その価値はこれらだけにとどまりません。本書は明治時代を通じて日本人と英語を結びつけ，日本の近代化に大きな役割を果し，また幾多の英語辞書の礎となりました。さらに見逃がせないのは，日本語研究の資料としての価値です。当時の生きた日本語を知る上で，また本書は何回も改訂されているので，社会的文化的激動期における日本語の変遷の過程を知るためにも重要なものです。

上述のように本書は初版以来何回か改訂され，1910年（明治43年）の第9版まで版を重ね，縮約版，翻刻版も出版されています。これらの中でも，1886年（明治19年）発行の第3版は，いわゆるヘボン式が初めて採用された版として，また明治初期に数多く造られた新語を取り入れた版として重要なものです。

なお本図書館では，ここに紹介した初版原本のほかに，初版の複刻版と上述の第3版の複刻版とを所蔵しています。

1977年度の主な館活動記録

4月　私大図書館協会・京都地区研究会常任幹事校
〃　大学院読書室，図書館3階に開室
〃　書庫の図書配置，移転委員会答申
〃　関西四大学図書館職員研修会に機械化グループ発足
〃　カナダ政府寄贈図書目録作成および展示
5月　3階書庫および，貴重書庫の完成
6月　3階書庫完成による図書配置移転の終了
〃　日販，図書館システム導入検討委員会発足
〃　日販図書カード採用について主要書店と懇談
7月　The National Union Catalog, pre—1956 imprints を受入れ
新島襄愛蔵の天球儀，補修を行う
9月　和書図書カード（日販）の利用の方針を決定
〃　洋書図書カード（丸善）の利用の方針を決定
〃　本学学生，図書館司書課程実習実施，40名
10月　日米友好基金による米国派遣研修員候補者に
〃　庶務課，丹羽賢二氏を推せん
〃　雑誌・新聞の登録方法の一部変更を決定
11月　雑誌・新聞の禁帯出シール貼付を取り止める
12月　蔵書目録第4巻の刊行を，外注方式に決定
〃　蔵書目録53年度以降について，コンピューター利用の検討をはじめる
1月　洋書図書カード（丸善）の利用を実施する
〃　洋書の目録カードサービス事務要領を検討
3月　ケーリ文庫目録を完成，出版
〃　荒木英学文庫目録を完成，出版

カウンターから

書庫の片隅から　—紙魚の戯言—

旧図書館（と言っても貴君達には，わからないかも知れませんが，現在の啓明館そう体育課や人文科学研究所・アメリカ研究所がある建物）では，本の一頁，一頁を噛みしめる事が出来ました。新図書館の様に暖房も冷房もなく，京都特有の冬の底冷えと夏の蒸し暑さは，薄暗い書庫では一層応えました。しかし，その苦しさも静かさの為に忘れてしまう程でした。床もギシギシと鳴るそんな中で貴君の先輩達は，互いに注意しあって静寂を守っていました。

今の建物は，場所も環境も申し分ありません。書庫では，約27万冊の蔵書と共に蜚蠊（ゴキブリ）も快適に暮しています。でもこの快適さをもってしても，太刀打ち出来ないものがあります。勉強するには若干寒むすぎたり暑すぎたりした旧図書館が持っていた最高の資産であった『静かさ』が，今は全く失なわれています。快適な環境が貴君達に，静かさを忘れさせているのでしょうか？　それとも世間の騒音が，忍び込んで来るのでしょうか？　本来物音のしないはずの書庫にまで聞こえてきます。静けさは閉館後しか訪ずれません。これでは本を噛みしめる事が出来ません。今の半分でも貴君達が，雑談をやめてくれれば本当の快適さがやってくるのではないですか。

嗚呼　静けさや　本に紙魚いる　書庫の中　　（本の虫）

"びぶりおてか"　同志社大学図書館報　No. 23　1978年4月1日　発行
発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 251—3971
編集責任者　楠見憲伸（図書館庶務課長）　印刷　芳文堂印刷所